

# 「城陽・青谷の文化遺産と歴史

## —京都府立大学の地域研究の報告会— 開催記録

西井 綾乃

(文学研究科史学専攻博士前期課程 1 回生)

2014年3月9日(日)、「城陽・青谷の文化遺産と歴史—京都府立大学の地域研究の報告会—」が青谷コミュニティセンター3階集会室にて開催された。この報告会は、京都府立大学文学部歴史学科の主催、青谷古文書を読む会・城陽市教育委員会の共催のもとでおこなわれ、聴衆はおよそ120人で、部屋の定員いっぱいの状況であった。午後1時から5時まで、6人の報告と座談会から構成され、会場から数多くの質問も寄せられたこともあり、とても充実した報告会となった。なお本報告会は、2011・2012年度ACTR「神社・街道を中心とした城陽市域文化遺産の調査と情報化」(研究代表者菱田哲郎)の成果をもとにしている。

以下、報告と座談会の概要を紹介する。

### ○報告会の内容

菱田哲郎 (京都府立大学文学部教授)

「城陽の神社と街道の調査から」

東 昇 (京都府立大学文学部准教授)

「青谷の梅林と城陽の産物」

竹中友里代 (京都府立大学文学部特任講師)

「城陽長池の製糸工場」

西井綾乃・鈴木史織 (京都府立大学文学研究科史学専攻大学院生)

「古文書から見た江戸時代の城陽」

司会：向井 祐介 (京都府立大学文学部講師)

### 座談会

塚脇康宏 (青谷古文書を読む会会長)

「青谷古文書を読む会の活動から」

座談「城陽・青谷の歴史と文化遺産を楽しむ」

コーディネーター：上杉和央 (京都府立大学文学部准教授)



当日の会場の様子（撮影：東昇）

### ○各報告と座談会の概要

菱田哲郎氏は「城陽の神社と街道の調査から」と題して、石灯籠調査や聞き取り調査といった京都府立大学歴史学科がおこなった調査の内容を紹介され、そのような現地調査と古文書の読解から判明した石灯籠奉納の背景を話した。東昇氏は「青谷の梅林と城陽の産物」として、ちょうど見頃をむかえつつあった青谷の梅林が、名所としてどのような由緒を集め、再生産してきたかを分析した。竹中友里代氏は、「城陽長池の製糸工場」と題して、長池にあった長池柞蚕製糸場と今道製糸場の2つの製糸場が、それぞれどのような工夫をしながら経営を続けていたのかを報告した。筆者と鈴木史織氏は「古文書から見た江戸時代の城陽」として、それぞれに江戸時代の史料をあげて紹介した。まず筆者は、「中島家日記に見る江戸時代の城陽」と題して、神職の日記から、現在も地域に残る祭や石碑の江戸時代における記述をとりあげ、身近なものでも江戸時代から現代へ連綿と受け継がれてきたものであるとまとめた。そして鈴木史織氏は「伊佐家文書「歴代記」と幕末の城陽」と題して、伊佐家が庄屋をつとめた上津屋村と、その庄屋としての立場と村の立地を背景に集め記述された、幕末の京都の情報や様相について報告した。

座談会では、青谷古文書を読む会会長の塚脇康宏氏より「青谷古文書を読む会の活動から」と題して、地域の古文書を読むだけでなく、現地に足を運び、関連する他県の文書を調べるなど、古文書の内容をより深く研究しておられることを報告された。その活動についてコーディネーターの上杉和央氏や東氏などからコメントが寄せられた。その後、塚脇氏より今回の報告のなかで疑問や関心をもった点をあげていただき、そこから各報告者が回答や報告への補足をおこない、当時の情報の流通や人々の都市への移動、観光や生産の背景と社会の流れなどが、古文書や石造物のような形となって地域に残っていることを説明した。そして、報告に関して地域に密着した質問を会場からも多数いただいた。

このような報告会は、京都府立大学歴史学科として初めての試みであったが、研究を地域の方に直接報告できるとともに、様々な反況を知ることができる大変有意義な会であった。

---

京都地域情報・文化遺産データベースの展開・活用  
— 「郡村誌」の地図化と二ノ瀬・岡崎を事例に—

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）

発 行 京都府立大学文学部歴史学科文化情報学研究室

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2014年3月31日

印 刷 株式会社 双林印刷社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル

---